

『最澄』について——日本精神の源流

栗田 勇 著

京都に旅をする、私は、いつも比叡のお山を眺める。穏やかで静かなたたずまいに、わが心の源流に触れる想いがする。今度はいつそう懐かしく、身近に暖かみさえ感じられる。

というのも、二十年来暖めてきた、そして、初稿からさらに十年を推敲についてやした、伝教大師最澄の伝記がようやく完成したからである。山脈を踏みわけ、ようやくエベレスト山頂の近くにたどりついたような気がする。

最澄ときいても、大方の人は、せいぜい、比叡山で天台宗を開いた名僧というくらいで、同時代の空海ほどは知られていない。千二百年の昔のことで資料も乏しい。

残された木像から見ても、凜然とした気迫を内に秘めているが、表面はふくよかで穏やかな学究という印象で、ドラマチックな人物には見えない。

ところが実は、この人物こそが、空海と並んで平安時代の初めに、日本の仏教、ひいては日本精神の源流をひらいたのである。

今日、私たちの知っている日本の仏教は、ほとんど鎌倉時代に興ったものだが、法然、親鸞、一編、蓮如の浄土諸宗や真宗、栄西、道元の禅、日蓮の法華宗など、源はこの比叡山から産まれた。お山を歩い

てゆくと、今もこれら宗の修行の跡地に出逢う。

よく葬式仏教といわれるが、日本仏教の礼儀は、真言・天台の密教と民間信仰の融合から生まれているといっている。比叡山は、日本人の仏教文化の原点だったのである。

これはどういうことなのだろうか。大胆に言えば三つあげることが出来る。

「経」による衆生の救い

一つは、最澄が故郷の近江を出て奈良の都で修行し、得度した頃は、東大寺の大仏建立をピークとしたバブル経済の末期に当たり、奈良仏教を総括する宮庁である僧綱が、国家イデオロギーを担っていた。

最澄はこの撰ばれた優者だけが救われる小乗仏教での立身出世を放棄、比叡の山中に入り、人とともに我も救われる平安仏教、天台法華宗の独立教団を設立し、「論」ではなく「経」による衆生の救いを説いた。そこには日本の古代からの自然の生命との共生の心が強く働いている。最澄の「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」という句につきる。

第二に、彼は学問好きで文献学への執念さえ持っていたが、叡山から一步も出ることを許さない十二年間の籠山行と共に、回峰行という実践と体験の行を窮極の務めとした。今もこの行は、千二百年間にわたり続けられている。

比叡山の修行の厳しさを「論湿寒貧」と云う。修学対論と山地の湿気と寒気、すべて世俗の欲を退けるためである。

最澄は云う。「道心の中に衣食あり、衣食のに道心なし」と。衣食とは、衣食住、つまり安樂な暮らしである。

物質的富貴を求めながら精神の純化は達せられない。それらを捨て切ったところから仏への道は始まるという自己の内面性の確立と自己否定の決意である。

第三は、このような個人的で内面的な修行とは、一見、裏腹にみえるが、彼は、遣唐使船団で中国の天台山を訪れ、世界宗教としての天台仏教を、禪、密を含め、日本にどう受け入れるかを考え、山麓の国清寺に日本人留学僧のための宿舎建設の基金を委託した。

また彼は唐の都、長安を中心とする国際世界の中で、大日本国という名称を用いた初めての人物であった。

その最澄が求めた人物像は「宝とは道心なり。道心あるの人、名づけて『国宝』となす」。この国について故山田恵諦天台座主は「社会」といつてもいいといわれた。最澄は仏教を、骨がらみに癒着した国家から引き離れたが、社会の機能、物質的社会を越えた精神的な制度として捕らえた。

私は「道心」を「志」どころざし」と読みたい。

彼は、爛熟した奈良から桓武帝が都を移し、逼塞した状況から人々を救うのは、「志」という精神的エネルギーだと説いたのである。

空海との断交の真相

さて、世間ではよく空海と最澄の交友と断交について面白おかしく取り沙汰している。

私は二人の往復書簡の跡をつまびらかにたどったが、その結論だけを簡単に記そう。

最澄も空海も、そして奈良仏教の一部の革新派も、平安時代の新しい教団を造りだす必要を感じていた。

しかし「論」から「経」へという布教の立場のためから、それぞれが別の途を進むことになる。

しかし、この現世で、凡夫も成仏できて救われねばならないという「大乘仏教」という理念は共通である。

空海は、それを深甚秘密の神秘体験に求め、最澄は行学での修行のプロセスに共生の生命として視た。

今日、世紀末を迎えた日本人は、世界の中で、政治経済の面で、さらには国家としての在り方と理念との間で、困難と閉塞の極みにある。日本の歴史を振り返るなら、聖徳太子により立国から、最澄による日本精神の自覚、また平安末から鎌倉期への混乱の時代に、叡山から甦った日本仏教へと、昏迷と再生を貫いてきたものも、最澄のいう「志」道心」だったのではないか。

「正統とは失われようとするとき甦るものである」とT・S・エリオットは云っている。私は、日本の再生を信じて比叡のお山を仰ぎみるのであった。

栗田 勇著『最澄』（一・二・三）

新潮社刊（一九九八年八月）

菊判 一巻六〇七頁 二巻五二四頁 三巻四八一頁

一巻 三、五〇〇円 二巻 三、三〇〇円 三巻 三、〇〇〇円